ROTARY INTERNATIONAL

Governor's Monthly Letter

TO CLUB PRESIDENTS AND SECRETARIES OF DISTRICT 366

GOVERNOR
Tsunejiro Hirai
DISTRICT 366

OFFICE: NIPPE BLDG.
ADDRESS: 8—10, 6-CHOME, FUKUSHIMA, FUKUSHIMA-KU,
OSAKA 553, JAPAN
TEL.: 06-454-0366
CABLE ADDRESS: INTEROTARY OSAKA

No.14 JUNE 30, 1976

TO DIGNIFY THE HUMAN BEING

人 間 に 威 信 を ！

各クラブ会長並びに幹事殿

任期の終りにこの歓び

Wonderful reports from G. S. E. members

平井常次郎

スコットランドに一人旅した帰途、マンチェスターからロンドンまで汽車で戻った。 旅客のエアラインなどある筈もない三十数年も昔の古い話である。

記憶ガボヤけてしまっているので、この鉄路の旅が四時間かかったか、五時間以上になったかもハッキリしないのだが、その時その客車内には五十歳がらみの、半白の背の高いイギリス紳士と、わたしとタッタ二人きりであった。

この、かなり長時間の車内で、二人は乗車した始めから下車する最後まで、互に一言の話も交わさなかったのである。

これが、もし陽気なアメリカ人とか、お人よしのロシア人などであったらどうだろう。沈黙どころか、言語の障壁など飛び越して、ベチャクチャとしゃべり続け笑いつづけて、車窓の淋しさを吹ッ飛ばしていたにちがいな

い。　わたしはこのとき、イギリス人の持つ孤高な性格を肌に感じて、むしろ敬意さえ拂いたい気持ちであった。

話は別だが、いまイギリスの各ロータリークラブは、むろん国際ロータリークラブの一員であることには間違いないが、しかし周知の如くR. I. B. I. として一つの結束を形造っているのである。

このような新旧いろいろのことを思って、わたしは本年ノッティンガムを中心とする第122地区にG. S. E. のメンバーを送り出すについて、果たしてうまくゆくであろうかと内心に淡い不安のような気持ちが漂っていたのである。

団長、祈祷会で説教

ところがどうだろう。　木川田団長（堺クラブ）に率いられた五名の若人達は、六週間の滞英中に、至るところで毎日毎夜、実に筆紙に尽くし難い温かい歓迎と優遇を受け、ロータリーの叫ぶ国際間の理解の増進と、この場合、日英両国民の友好に美事な金字塔を打ち建てて帰って来たのである。

昨年の春、一足先きにイギリスから日本にやって来たG. S. E. の交換グループに対して、大阪及び和歌山のロータリーメンバーが、実に心のこもった歓迎をしたことに対する感謝の気持ちもあったではあろうが、とにかくロータリアンはむろんのこと、一般市民のだれかれの区別なく、一行の赴くところその町その村の人びとが、期せずして歓迎の渦を描いて迎えてくれたのであった。

ロータリアンのお宅に民宿して、その家族とともに語り、ともに笑って、真に隔りのない交歓は次から次へと切れずにつづいていった。歓迎会、パーティー、五メンバーそれぞれの研究専門分野における視察見学の案内、研究討論会のお世話など、至れり尽くせりのもてなしであった。もっとも、木川田団長はむかしこのあたりに在勤したことがあるので知人が多く、〝Father John〟の愛称であっちこっちから引っ張り凧のいそがしさであったという。

木川田氏が或る日曜の夜、マンスフィールドの教会の祈禱会で説教し、今日の世界の不安定な情勢を眺めるにつけても、世界の人類はもっとお互の接触を大切にして、現代の荒廃した世道人心を正常に戻さねばならぬ、というような意味のことを述べたところ、これが非常な共感を得た。　現第122地区ガバナーであるブルーム氏の如きも、今回日本からの一行を迎えて、この夜ほど感銘したことはなかったと、わたしへの私信で書いていた。

霊峰で叫ぶ〝おお、ROTARY！〟

六月十一日に元気よく帰国した一行を迎えて、同二十三日夜、百々地区G. S. E. 委員長のきもいりで、大阪コクサイホテルにパストガバナーの諸先生が集まって歓迎の小宴をひらいた。　その席上、一行はそれぞれに受けた強い印象を具体的に報告して、あの家の思い出、あのパーティーでの感激、イギリスでは稀らしいこの春の好晴のもとで見学したあの工場、あの刑務所、あの学校などについてよく語った。そして、ロータリーが奉仕部門の一つとして提唱している国際奉仕の諸活動のうちで、G. S. E. が果たしつつある大きな効果について、素晴らしい各自の体験を述べるのであった。

この一行は、日本へ帰る途中で、フランスに立ち寄り、標高3800メートルのミディ針峰に登った。ロープウェイのゴンドラの中でだんだん稀薄になってゆく空気のため、一人のイタリア婦人が貧血を起こして倒れた。同行の人がびっくりして、声を張り上げて〝ドクター、ドクター！〟と連呼したが、このような高峰の頂上にお医者さんのいるはずがない。ところが、わがG. S. E. メンバーには二名の少壮医師がいる。木田君がまず駆け寄って素早く応急手当を施して、この婦人の急を救ってあげた。

同じゴンドラで登った人びとは、みんなとても感動していたが、わが一行がロータリーのG. S. E. のグループだと聞くに及んで『おお、ロータリー！』と叫び、手を挙げてこの奉仕に深い感謝を捧げるのであった。これもおみやげ話の一つである。

いま、わたしのガバナーの任期が終るに当り、最後にこのようなinternationalに心あたたまるリポートを手にすることが出来たのは、実に巨きな感激である。